定義とプラマーナの定義

木　村　誠　司

I

ダルマキールティ Dharmakīrti (600－660) 著『量評釈』*Pramāṇavārttika*「量成就」Pramāṇasiddhi章 kk. 1-7 は「プラマーナの定義」(pramāṇa-lakṣaṇa) を説く詩節と言われてきた。近年、多くの学者が、この詩節に注目し、主に、『量評釈』の注釈書に基づいて研究を進めてきた。その成果によれば、この詩節の基本構造は、「まず、欺かないこと (avisaṃvāda)〔以下Xと呼ぶ〕と未知の対象を明らかにすること (ajñātārthaprakāśa)〔以下Yと呼ぶ〕というふたつの定義をプラマーナに与え、その定義を仏陀にも適用し、仏陀がプラマーナであることを宣言する」というものである[1]。さらに、XとYという定義の関係について、注釈者間に見解の相違があることも、知られるようになった。たとえば、デーヴェンドラブッディ Devendrabuddhi (630－690) は、XとYを別な定義であるとしながらも、両者の強い関連性を表明している。これに対し、プラジニャーカラグプタ Prajñākaragupta (8世紀)[2]は、XとYを全く別な次元の定義としている[3]。このように、かなりの研究成果が蓄積されてきたにもかかわらず、肝心のダルマキールティの見解は明確にされたとは言い難い。それ故、注釈書に頼る従来の研究方法に、強い不満を漏らす学者も現われた。フランコ E. Franco 氏は、XとYの関係に関する注釈者達の見解を不適当であるとした。フランコ氏からみれば、注釈者達の見解は、ダルマキールティの意図を正しく伝えるものではないのである。氏は言う。

> 私は、彼ら〔＝注釈者〕の器用さや優美さや明敏さや魅力を否定するものではないけれど、ダルマキールティに関して彼らが信頼に足るものであることを納得させられたわけではない。彼らには、むしろ、巧妙ではあるが、狡猾な注釈者のトリックという印象を与えられたのである[4]。

こう述べて、フランコ氏は、注釈者と訣別し、独自の解釈を下すが、それは、次の

ような珍妙なものである。

この一節におけるダルマキールティの目的は、認識手段の一般的な理論を発展させることではなく、むしろ、仏陀が唯一真の認識手段であって、自在神や他の常住な実体はそうではない、と論証することである。…中略…もし、ダルマキールティはプラマーナに一般的定義を与えることを試みずに、ただ仏陀がプラマーナであることを論証せんとした、という私の主張が正しいとするなら、次のように仮定するのは筋が通ったことであろう。すなわち、彼は既成のあるいは周知のプラマーナの特性を採用して、仏陀がそれらの条件を充たしているかどうかテストしたと[5]。

XとYが、ダルマキールティの先人達によって、プラマーナに関わりを持つものとして扱われていたことは、文献上確認されている[6]。それを、ダルマキールティが採用したという可能性もあるだろう。しかし、XとYが先人達によってどのような意味で使用されていたのか、あるいは、ダルマキールティによって何らかの変更が加えられたのか等の研究は、まだこれからである。フランコ氏は、そうした地道な研究を踏まえることなく、「ダルマキールティは、既成のあるいは周知のプラマーナの特性を採用した」と断じ、「ダルマキールティの目的は、認識手段の一般的な理論を発展させることではなく…」であるとか、「ダルマキールティはプラマーナに一般的定義を与えることを試みずに」などと述べている。どうみても、フランコ氏の解釈は勇み足であり、説得性に欠けるのである。これでは、何のために注釈者達を批難したのかわからない。とはいえ、注釈者達の見解について、釈然としない想いを抱いていたのは、筆者も同じである。ひょっとしたら、これまでの研究者が見落としてきたことがあるのではないだろうか。もし、そうならば、それは何だろうか。結論から言うと、それは「定義」である。従来の研究者は、「量成就」章 kk. 1-7 を「プラマーナの定義」を説く詩節と呼びながら、プラマーナにばかり心を奪われて、定義に目を向けることを忘れていたのである。筆者は、このことを、チベットの学僧サキャパンディタ Sa skya paṇḍita (1181－1251) の『量正理蔵』*Tshad ma rigs pa'i gter* を通じて教えられた。『量正理蔵』では、第八章を「定義を考察する章」(mtshan nyid brtag pa'i rab tu byed pa) とし、定義の規則をまず論じ、「プラマーナの定義」をその付論として扱っている。以下では、『量正理蔵』で説く定義の規則を調べ、その規則がダルマキールティやインドの注釈家達にも認められていたか否かを検討し、認められていたならば、「プラマーナの定義」にその規則を適用し、考察を進めてみたい[7]。

II

『量正理蔵』では、次のように定義（mtshan nyid）の三欠陥について言及する。

不遍充（ma khyab, avyāpti）・過大遍充（khyab che, ativyāpti）・非存在（mi srid, asaṃbhava）の三つが、定義の一般的欠陥である。（『量正理蔵』p. 195, ll. 4-5）

ma khyab khyab che mi srid gsum // mtshan nyid kyi ni spyi skyon yin /

この三欠陥を排除したものが、正しい定義とされるのである。つまり、それが定義の規則ということになる。それぞれの欠陥を簡単に説明すれば、不遍充は、定義が定義されるものを遍充していない欠陥。過大遍充は、定義が定義されるもの以外のものを遍充している欠陥。「非存在」は定義と定義されるものが全く無関係となる欠陥である[8]。さて、では、ダルマキールティや注釈者達は、これに類した定義の規則を認めていただろうか。ダルマキールティは、『量評釈』「為他比量」Parārthānumana 章 k. 84 および『量決択』*Pramāṇaviniścaya*「為他比量」章 k. 22 において、次のように述べている[9]。

主張（pakṣa）の定義は、不遍充と過剰（vyatireka）〔＝過大遍充〕の二つを排除するために語られる。

pakṣasya lakṣaṇam / ucyate parihārārtham avyāptivyatirekayoḥ. //

ma khyab dang // ldog pa dag ni spang ba'i phyir // phyogs kyi mtshan nyid rjod pa yin（『量決択』「為他比量」章 Ce 195a[6]）

これによれば、ダルマキールティは、不遍充と過大遍充二つの欠陥を排除したものが定義である、と認めていることになる[10]。非存在は、定義の資格すらないということであろうから[11]、ダルマキールティは、基本的に、定義の規則を認めていた、と考えてよいであろう。筆者の調査の範囲では、インドのみならずチベットの注釈者もすべて、ダルマキールティに順じて、定義の規則を認めている[12]。とすれば、この規則を kk. 1-7 に適用して考察を進めることは、妥当であろう。

では、考察に入ろう。まず、k. 1 で「プラマーナとは欺かない知である」（pramāṇam avisaṃvādi jñānam）とXが説かれる。それに対する不遍充は k. 1 において排除される。k. 1 では「言葉に基づく認識（śābda）においても〔プラマーナたる資格はある〕」（śābde 'pi）と述べられ、言葉に基づく認識をプラマーナから除外

することが避けられている。次に、過大遍充は、k. 3において排除されている。k. 3では「すでに把握されたものを把握する（gṛhītagrahaṇa）ので、世俗的なもの（sāṃvṛta）は〔プラマーナとは〕認められない」（gṛhītagrahaṇān neṣṭaṃ sāṃvṛtam）と述べられ、世俗的なもの[13]をプラマーナに含めることが避けられている。ここで、疑問が生ずる。定義の規定は、k. 1とk. 3でクリアされていた。とすれば、k. 3を説いた時点で、Xは正しい定義であると確認されたことになる。一方、Yは、k. 5で「あるいは、未知の対象を明らかにするもの〔がプラナーマである〕」（ajñātārthaprakāśo vā）と説かれているが、その前後の詩節において、Yに定義の規則は適用されていない。つまり、Yは正しい定義であるのかないのか確認されていないことになる。このように、定義の規則という観点を導入した場合、Yの扱いは、きわめて困難なものとなる。サキャパンディタの取った手段は、次のようなものである。

> 阿闍梨ディグナーガ（Phyogs kyi glang po）は、典籍のある部分でXを、またある部分でYを説いたが、吉祥なるダルマキールティ（Chos kyi grags pa）はその二つの真意を同一とし[14]…（『量正理蔵』p. 213, ll. 2-4）
>
> slob dpon phyogs kyi glang pos gzhung gi cha 'ga' zhig tu mi bslu ba dang 'ga' zhig tu ma shes don gsal du gsungs la / dpal ldan chos kyi grags pas de gnyis dgongs pa gcig tu mdzad nas

サキャパンディタは、XとYを同一とみなすことで、この困難を回避した。サキャパンディタのXY同一説は、しかし、XとYを同列に扱うものではない。正しい定義であることが確認されたXと、そうでないYとは、自ずから扱い方は異ってくるはずである。そのような立場から、サキャパンディタの見解をさらに極端に押し進めたのは、『量正理蔵』の注釈者コラムパGo ram pa（1429－1489）である。コラムパは次のように言う。

> Xだけによって、「プラマーナの定義」は完成しているのである。…『量評釈』や『量決択』（*rNam 'grel nges*）の諸典籍は、Xを満たしているか、満たしていないかということに基づいてプラマーナであるなしを規定しているようにみえるが、「新たに…」〔＝Y〕という語句を加えているようにはみえないからである。（『量正理蔵の難解個所の説明　七部明説』*Tshad ma rigs pa'i gter gyi dka' ba'i gnas rnam par bshad pa sde bdun rab gsal* p. 58 / 3･3-4･2）
>
> mi slu ba'i shes pa tsam gyis tshad ma'i mtshan nyid yongs su rdzogs pa yin te

…rnam 'grel nges kyi gzhung rnams kyi mi slu ba tshang ma tshang gi sgo nas tshad ma yin min gyi rnam bzhag mdzad par snang gi gsar du zhes pa'i tshig bsnan pa mi snang ba'i phyir

このコラムパの見解[補注1)]は、プラマーナに第二の定義Yを認めるインドの注釈家達すべてを批判するきわめて大胆なものである。しかし、先に確認したように、ダルマキールティや注釈者達が、そろって、定義の規則を認めている以上、それに基づいたコラムパの見解を非論理的と言うことはできないであろう。そして、奇妙なことに、インドの注釈家の中にもコラムパ的見解は見出せるのである。その一人ヤマーリ Yamāri（11世紀）[15)]は、次のように述べる。

そのように、Xを備えたものだけがプラマーナの定義であると述べ、不遍充と過大遍充（ha cang khyab pa）の過失も排除した。（『量評釈荘厳注　極円浄論』*Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā suparišuddhā* Phe 257a$^{6-7}$）

de ltar mi slu ba dang ldan pa nyid tshad ma'i mtshan nyid du rjod pa dang / ma khyab dang ha cang khyab pa'i nyes pa yang spangs pa

ヤマーリは、定義の規則を踏まえた上で、コラムパと同一の見解を述べている。しかるに、ヤマーリは、Yを第二の定義としているのである[16)]。シャーキャブッディ Śākyabuddhi（660－720）の次のような見解はどうであろう。

別の第二の定義〔＝Y〕も作られたのではない。なぜなら、これ〔＝X〕によって遍充されない対象に対して別な定義が適用されるからである。これ〔＝X〕だけによって二つのプラマーナは遍充されるからである。（『量評釈注』*Pramāṇavārttikaṭīkā* Je 79A$^{6-7}$）

gzhan mtshan nyid gnyis pa yang byar yod pa ma yin te / gang la 'dis ma khyab pa'i yul la mtshan nyid gzhan 'jug par 'gyur ro // 'di nyid kyis tshad ma gnyis la khyab pa nyid kyi phyir ro //

これも、コラムパの見解と酷似している。そして、シャーキャブッディもYを第二の定義としている[17)]。さらに、デーヴェンドラブッディは、こう述べる。

目的の達成（don byed pa, arthakriyā）[18)]についてXであることに基づき、〔Yの〕あれこれを理解すべきである。（『量評釈細注』*Pramāṇavārttikapañjikā* Che 5b^{6}）

don byed par mi slu ba nyid kyi phyir de dang de rtogs bar bya 'o //

これは、サキャパンディタの見解を彷彿とさせるであろう。当然のことながら、デーヴェンドラブッディもYを第二の定義としている[19)]。では、ダルマキールティは

どうなのだろう。ダルマキールティの『量決択』「現量」章の冒頭部分では、プラマーナに類同する「正しい知」[補注2]の定義が説かれている。

正しい知（yang dag pa'i shes pa, samyagjñāna），それは二種である。すなわち、知覚（mngon sum, pratyakṣa）と推理（rjes su dpag, anumāna）と言われるのである。この二つによって、対象を確定して、行動する場合、目的の達成についてXだからである。(p. 30. ll. 15-18)

yang dag pa'i shes pa de ni rnam pa gnyis te / mngon sum dang ni rjes su dpag / ces bya'o // 'di dag gis don yongs su bcas nas 'jug pa na don bya ba la bslu ba med pa'i phyir ro //

ここでは、Xだけが示されている。ダルマキールティもコラムパと同一の見解を取っていたと考えることは可能である。コラムパ的見解は、実は、別な角度からの考察によっても浮かび上がってくる。次にその有様をみてみよう。

上記の『量決択』に対するダルモッタラ Dharmottara (740－800) [補注3] 注から考察を始めよう。ダルモッタラは、まず、Xを「獲得させること」(『量決択注』 I *Pramāṇaviniścayaṭīkā* p. 26, l. 15) と同一視する。そして、さらに次のように言う。

獲得させることは、行動を促すことと別ではない。…行動を促すことと理解することも別なものではない。それ故、あらゆるプラマーナは、未知のものを対象とするもの（ma rtogs pa'i don can, anadhigatārtha）に他ならない。(『量決択注』 I p. 34, ll. 7-16)

thob par byed pa nyid ni jug par byed pa las gzhan ma yin te…'jug pa yang khong du chud pa las gzhan ma yin te / de'i phyir tshad ma thams cad ni ma rtogs pa'i don can kho na yin no //

ダルモッタラは、こうして、「未知のものを対象とするもの」というYと同内容の概念をXから導き出した。これを「量成就」章の kk. 1-3 と比較してみよう。k. 3 の「すでに把握されたものを把握するので、世俗的なものは〔プラマーナとは〕認められない」という部分も、Yと同内容である。先に見たように、k. 3 のその部分は、Xの過大遍充を排除するために説かれていた。とすれば、それも、やはり、Xから導かれたものである。さらに、デーヴェンドラブッディの k. 1 に対する注釈中には、「〔後の知ではなく〕最初〔の知〕こそがプラマーナである」(『量評釈細註』 Che 2b[6]) (dang po nyid tshad ma yin te) という一文がある。ということは、Xを

注釈している時、デーヴェンドラブッディは、Yと同内容のことを念頭に置いているのである。これらのことを総合すると、YはいつでもXから導かれる、という結論が得られる。言い換えると、YはXに含まれ、Xから派生する概念であり、プラマーナの定義はXひとつで十分ということになる。こうして、ここでも、コラムパ的見解が浮かび上がってくるのである。どこからみても、Yを第二の定義とする有力な理由はない。それなのに、なお、インドの注釈者達がYをプラマーナの第二の定義とする理由は何だろうか。以下に、その代表的見解をみてみよう。

デーヴェンドラブッディは、次のように言う。

〔未知の対象を明らかにすること＝Yにおいて〕「対象」を述べることで二つの月等が顕われる〔知〕はプラマーナたる資格がないのであると説明している。なぜなら、その〔二つの月という〕未知のものを把握したとしても、それ〔プラマーナ〕の対象ではないからである[20]。（『量評釈細注』Che 6A$^{6-7}$）

don smos pas ni zla ba gnyis la sogs par snang ba tshad ma nyid ma yin par bshad de / mi shes pa de bzung du zin kyang de'i don ma yin pa'i phyir ro //

筆者からみれば、この注釈は失敗である。その理由として、『量評釈』「現量」Pratyakṣa章 k. 1 を挙げてみたい。

プラマーナは、二種である。対象が二種であるから。目的の達成について能力があるか、能力がないか〔どちらか〕であるから。〔眼病者の知に顕われる〕髪（keśa）等は、対象ではない。〔それらを〕対象であると認めることはないから。

mānaṃ dvividhaṃ viṣayadvaividhyāc chaktyaśaktitaḥ /
arthakriyāyāṃ keśādir nārtho 'narthādhimokṣataḥ //

ここでは、「二つの月」と同種のものである「眼病者の知に顕われる髪」[補注4]は、何の苦もなく対象ではないとされている。もし、「目的の達成」という概念を導入したことによって、そうされたと考える人がいるならば、その人に対しては、「量成就」章の k. 1 を示そう。そこには、「Xは、目的の達成が確実なことである」（arthakriyāsthitiḥ / avisaṃvādanam）という一文がある。k. 1 が説かれた時点で、「二つの月」が対象でないことは、明らかなことになるのである。故に、デーヴェンドラブッディは、Yを第二の定義とする理由付けに失敗した。このような、すぐにでもわかるような失敗を犯した背景には、明らかに、Yを第二の定義とすることへの躊躇があったと思われるのである。

では、次にプラジニャーカラグプの注釈をみてみよう。彼は、次のように言う。

〔未知の対象を明らかにすること＝Yにおける〕「対象」という言葉によって、ここでは、勝義（paramārtha）が述べられているのである。Yは勝義を明らかにすることという意味である。さらに、勝義とは、不二を本質とするのである。…そのうち、これ〔＝Y〕は、勝義的プラマーナの定義であり、一方、前者〔＝X〕は、世俗的プラマーナの〔定義である〕[21]。（『量評釈荘厳』[補注5] *Pramāṇavārttikālaṃkāra*, p. 30, ll. 19-22）

arthaśabdenātra paramārtha ucyate / ajñātārthaprakāśa iti paramārthaprakāśa ity arthaḥ / paramārthaś cādvaitarūpatā / …tatra pāramārthikapramāṇalakṣanaṃ etat / pūrvaṃ tu sāṃvyavahārikasya

プラジニャーカラグプタは、XとYを全く別次元のプラマーナの定義とみなす。その時、コラムパ的見解は、Xだけが世俗的プラマーナであるという意味に変わる。そうすると、YはXから独立した定義となることができる。しかも、Yは不二たる勝義の定義であるから、定義の規則にも縛られない。そこまで、プラジニャーカラグプタが考えたとすれば、彼の注釈は成功である。だが、プラジニャーカラグプタにも、Yを第二の定義とすることへの逡巡はあったであろう[補注6]。それは、彼の後継者ヤマーリ[補注7]がコラムパ的見解を示したことからもうかがえるのである。ただ、プラジニャーカラグプタは、Yの処遇にまつわる困難さを自説のために利用するというしたたかな解釈の冴えを見せたと思われる[補注8]。それはそれとして、では、プラジニャーカラグプタこそが、ダルマキールティの意図を正しく伝えたとせざるを得ないのだろうか。それを否定することは、難かしい。しかし、よくよく考えてみると、XとYの二つをプラマーナの定義とするということ自体、注釈書で言われているにすぎないのである。あくまでも、可能性としてではあるが、インドの注釈家達すべてが、ダルマキールティの意図を誤解した、ということもないわけではないだろう。それを疑う材料は、すでに十分揃っているのではないだろうか。なにしろ、ダルマキールティの自著『量決択』の冒頭では、Xだけしか示されていない。しかも、YはXから派生する概念であるから、わざわざ、述べる必要もない。Yと同内容のことは、直前のk. 3で示されているので、k. 5で再説するのは、無駄でもある。さらに、ダルマキールティ自身が認める定義の規定からしても、Yを第二の定義とするのは望ましくない。つまり、どうみても、Yはプラマーナの第二の定義ではないのである。さて、では、ダルマキールティにとってYは何なのか。

それを理解するためには、「量成就」章の目的と構成を考えるべきであろう。この章の目的は、仏陀がプラマーナであることを論証することにある。それは、kk. 1-7だけで達成されるものではない。後に続く四聖諦等の仏説を検討することを通じて完成されるとみるべきであろう。kk. 1-7は、この章のイントロダクションに相当する。そこでは、k. 8以降の詩節において論証が達成されることも示唆しておかねばならない。そこでYが述べられる。Yは、ajñātārthaprakāśo vā という文で説かれるが、その文は、実は、śāstraṃ mohanivartanam / ajñātārthaprakāśo vā という繋りの文である[22]。この śāstra とは「量成就」章、artha とは「k. 8以降の内容」と解釈すれば、

〔「量成就」章という〕論書は、迷妄を滅ぼし、あるいは、〔仏説という〕未知の内容を明らかにするものである。

という訳が成立する。Yは「量成就」章で説かれる仏説に対するダルマキールティの自信の現われなのである。当然、ダルマキールティは、Yを強調したであろう。さらに踏み込んだ見方をすれば、Yは四聖諦等の仏説を示さない『量決択』等においては、重要な意味を持たないのである。『量決択』の冒頭部分でYが説かれなかった理由もそこにある。つまり、ダルマキールティは、周到な計算の上で、「量成就」章の冒頭においてYを強調したと思われる。ところが、そのことが、注釈者を拘束し、誤解を招く注釈を生む原因となったのである。以上によって、Yをプラマーナの第二の定義とすることは、ダルマキールティの意図ではない、ということが明らかとなった。筆者の見解は突飛なものに写るかもしれないが、釈然としない注釈者達の見解と一体、どちらに説得力があるだろうか[23]。

注

1）Vittorio A. Van Bijlert: *Epistemology and Spiritual Authority*, Wien 1989, p. 119, 服部正明「仏教論理学派の宗教性」前田専学編『インド中世思想研究』1991, pp. 153-155.

2）プラジニャーカラグプタの年代については小野基「仏教論理学派の系譜—プラジニャーカラグプタとその後継者達—」哲学・思想論集第21号 pp. 161-160 参照。

3）注1)のビジュレール本 p. 151 および E. Franco: The Disjunction in Pramāṇavārttika, Pramāṇasiddhi Chapter Verse 5c, *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition* ed. by. E. Steinkellner, Wien 1991, pp. 42-46. フランコ論文は、注釈者達の見解をわかりやすく整理している。

4）注3)のフランコ論文 p.44.

5）注3)のフランコ論文 pp. 45-48.

6）Steinkellner, E & H. Krasser: *Dharmottaras Exkurs zur Definition gültiger Erkenntnis im Pramāṇaviniścaya*, Wien 1989, p. 1 の notes 2 参照。

7）『量正理蔵』では、「定義と所定義は1対1でなければならない」という規則も説いている。この規則は、インド由来のものであるか否か判然としない。それ故、インドの注釈家達を、この規則によって判定するのは不当である。そのような観点から、拙稿「チベット仏教における「プラマーナの定義」」駒沢短期大学仏教論集　第2号　1996, pp. 250-230 を書いた。その意識は、変わっていないが、不毛な議論とまで断じたのは行きすぎであった。また、チベットにおける定義を扱った研究には、小野田俊蔵「mtshan ñid と mtshon bya について」印仏研 vol. 33, no. 1, 1984, pp. 92-95, Leonard W. J. van der Kuijp: *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology*, Wiesbaden 1983, pp. 65-69 がある。

8）チベットの定義は、定義・所定義（mtshon bya）・定義例（mtshan gzhi）の三要素によって構成される。一方、インドの定義は、定義・所定義（lakṣya）の二要素によって構成されている。しかし、両者に、根本的な相違はないと思われる。牛を例にとれば、チベットでは、定義＝瘤や垂れ肉、所定義＝牛、定義例＝個々の牛となり、インドでは、定義＝瘤や垂れ肉、所定義＝個々の牛となる。インドの所定義がチベットでは定義例に相当する。本稿の三欠陥の説明では用語上の混乱を避けるために、「定義されるもの」という言葉を用いた。インドとチベットの定義の異同については、今後、さらに検討を加えるつもりである。インドの定義に関しては、すでに多くの研究があるが、その代表的なものに、J. F. Staal: The Theory of Definition in Indian Logic, *Journal of American Oriental Society*, Vol. 81, no. 2 pp. 122-126 がある。最近の研究には、佐藤裕之「「定義」の定義―インド哲学における「定義」をめぐって―」仏教文化　第32・33号H 7 年, pp. (3)-(29) がある。両論文ともに、定義の三欠陥について説明している。チベットの定義については、前掲注7)の小野田論文・拙稿参照。三欠陥については、拙稿「ダルモッタラにおけるプラマーナの定義」駒沢短期大学研究紀要第25号H 9 年, pp. 133-145 参照。

9）『量正理蔵』では、別の教証を示している。それについては、前掲注 8）の拙稿 pp. 136 参照。それらの詩節については、T. J. F. Tillemans: Pramāṇavārttika IV (5), *WZKS* Bd. XXXIX, 1995, pp. 115-118 に英訳と解説がある。なお、『量正理蔵』では三欠陥の排除が不備であるとして、ダルモッタラの「プラマーナの定義」を批判している。それについても、注8)の拙稿参照。

10）定義のサンスクリットはlakṣaṇaである。ダルマキールティの著作において、lakṣaṇaは、実は、様々な意味で使用されている。svalakṣaṇa・sāmānyalakṣaṇaは一般に、「自

相」・「共相」と訳され、upalabdhilakṣaṇaprāptaは「認識されるための条件を備えている」と訳される。定義という訳を与えたい用例は、たとえば、次のようなものである。

目的を達成する能力があることとないこと、それだけが、実に、実在と非実在の定義である。(『量評釈』「為自比量」Svārthānumāna 章　自注 p. 84, ll. 5-6)

idam eva hi vastvavastunor lakṣaṇam yad arthakriyāyogyatā 'yogyatā

このlakṣaṇaを、条件や特質と訳しても異和感はない。定義と訳す必然性があるものとそうでないものを、一体、どのように判別すればよいのか。そういう問題は、今後の課題とせざるを得ない。

11) B. K. Matilal: The Intensional Character of Lakṣaṇa and Saṃkara in Navya-Nyāya, *Indo-Iranian Journal*, vol. VIII, 1964-65, p. 91 では「非存在は不遍充の極端なケースである」と述べられている。とすれば非存在は不用となろう。

12) 以下に注釈者達の見解を列挙する。

A)『量評釈』「為他比量」章 k. 84 に対する注釈

インド

デーヴェンドラブッディ

定義において、不遍充と過剰（＝過大遍充）の二つを排除するためにである。(『量評釈細注』Che 285b[2])

mtshan nyid la / khyab pa med dang ldog pa dag / spang ba'i don du'o /

シャーキャブッディ

〔デーヴェンドラブッディ注の〕「定義において不遍充と過剰の二つを排除するためにである」と言うことについて、〔説明すれば〕その主張に対して不遍充とは遍充がないことである。過剰とは過大遍充であり、つまり、その二つを排除するためなのである。(『量評釈注』Nye 262a[3-4])

mtshan nyid la / khyab pa med pa (read dang) ldog pa dag / spang ba'i don du'o zhes bya ba la / phyogs de la khyab pa med pa ni khyab pa yod pa ma yin pa'o / ldog pa ni shin tu khyab pa ste de dag spang pa'i don du'o /

プラジニャーカラグプタ

ありとあらゆる定義は、不遍充と過剰〔＝過大遍充〕の二つを排除するためなのである。(『量評釈荘厳』p. 520, l. 26)

sakalam eva lakṣaṇam avyāptivyatirekayoḥ parihārāya

ヤマーリ

不遍充と過大遍充の過失を排除するためである。(『量評釈荘厳注　極円浄論』Tse 63b[5])

ma khyab pa dang ha cang khyab pa'i nyes pa ma (read nyes pa) spang pa'i phyir ro /

ジャヤンタ

不遍充と過大遍充の二つの（『量評釈荘厳注』*Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā* Ne 247a[4]）

ma khyab pa dang / khyab ches pa dag

マノーラタナンディン Manorathanandin

主張一般の過失、不遍充と過剰の二つを排除するために、主張の定義は語られる。過剰とは、余分なもの、つまり過大遍充という意味である。（『量評釈注』*Pramāṇavārttika-vṛtti* p. 378, ll. 17-18）

pakṣamātrānuṣaṅgiṇor avyāptivyatirekayoḥ parihārārthaṃ pakṣalakṣaṇam ucyate vyatireka ādhikyam abhivyāptir (read ativyāptir) ity arthaḥ

チベット

ウユクパ 'U yug pa（−1253）

一般に、すべての定義は不遍充と過大遍充を排除するためである。（『量評釈注　正理蔵』*Tshad ma rnam 'grel gyi 'grel pa Rigs pa'i mdzod* p. 289, l. 3）

spyir mtshan nyid thams cad ni ma khyab pa dang khyab ches pa spangs pa'i don du yin

タルマリンチェン Dar ma rin chen（1364−1432）

主張の定義は何らかの定義例に対して不遍充であることや、定義例以外のものに対して過剰つまり過大遍充であることを排除するためである。（『量評釈頌の解説　解脱道不顚倒明説』*Tshad ma rnam 'grel gyi tshig le'ur byas pa'i rnam bshad Thar lam phyin ci ma log par gsal ba* 375a[6]）

phyogs kyi mtshan nyid mtshan gzhi 'ga' la ma khyab pa dang / mtshan gzhi min pa la ldog pa khyab ches pa dag spangs pa'i ched du yin

ケードゥプジェ mKhas grub rje（1385−1438）

主張の定義を示すこの個所では、主張に不遍充・過大遍充等の矛盾が少しもないために…（『広大なる論書量評釈の広説　正理大海』*rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rgya cher bshad pa Rigs pa'i rgya mtsho* Da 46b[1−2]）

phyogs kyi mtshan nyid ston pa'i skabs 'dir ni phyogs la ma khyab khyab ches sogs kyi 'gal ba cung zad kyang med pa'i phyir

ダライラマ一世 Dalai Lama I（1391−1474）

不遍充と過剰〔すなわち〕過大遍充の二つを排除するために、主張の定義を説明したのである。（『量評釈善説』*Tshad ma rnam 'grel legs par bshad pa* 14a[6]）

ma khyab pa dang ldog pa khyab che pa dag ni spang ba'i phyir du phyogs kyi mtshan nyid bshad pa yin

コラムパ

不遍充と過剰〔すなわち〕過大遍充の二つを排除するために、主張の定義〔はある〕。（『広大なる論書量評釈の解説　普賢光明』*rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rnam par bshad pa Kun tu bzang po'i 'od zer* p. 170 / 2·4）

ma khyab pa dang ldog pa khyab ches pa dag ni spang ba'i phyir du phyogs kyi mtshan nyid

シャーキャチョクデン Śākya mchog ldan（1428－1507）

不遍充と過剰〔すなわち〕過大遍充と非存在を排除することができる。（『広大なる論書量評釈の解説　普賢法海』*rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rnam bshad Kun bzang chos kyi rol mtsho* p. 629, l. 7-p. 630, l. 1）

ma khyab pa dang / ldog pa khyab ches pa dang / mi srid pa dag ni spang nus

B）『量決択』「為他比量」章 k. 22 に対する注釈

インド

ダルモッタラ

認めた対象に対する不遍充、そして過剰〔すなわち〕認めない対象に対する過大遍充の二つを排除するために、主張の定義を述べたのである。（『量決択注』III、Tshe 36a[7]）

'dod pa'i yul (read yul la) ma khyab pa dang / ldog pa mi 'dod pa'i yul la ha cang khyab ches pa dag spangs pa'i phyir phyogs kyi mtshan nyid brjod pa yin no

ジニャーナシュリーバドラ Jñānaśrībhadra

不遍充と過剰〔＝過大遍充〕の二つの（『量決択注』*Pramāṇaviniścayaṭīkā* Tshe 243a[4]）

ma khyab pa dang bzlog pa dag

チベット

プトゥン Bu ston（1290－1364）

主張において、認めた対象に対する不遍充と過剰すなわち過大遍充の二つを排除するためである。（『量決択注　語義解明』*Tshad ma rnam par nges pa'i ṭīk Tshig don rab gsal* p. 387, l. 4）

phyogs su 'dod pa'i yul la ma khyab pa dang ldog pa ste khyab ches pa dag ni spang pa'i phyir du'o

タルマリンチェン

不遍充と過剰〔すなわち〕過大遍充の二つを排除するために、主張の定義を述べたのである。（『量決択大注　密意解明』*bsTan bcos tshad ma rnam nges kyi ṭīk chen dGongs pa rab gsal* Nya 69a[6]）

ma khyab pa dang ldog pa khyab ches pa dag ni spang ba'i phyir du phyogs kyi mtshan nyid brjod pa yin

13) 「世俗的なもの」とは、デーヴェンドラブッディによれば、「数（grags）や挙げる（'degs）等を対象とする世俗知」（grags dang 'degs pa la sogs pa'i yul can gyi kun rdzob kyi shes pa）（『量評釈細注』Che 3b[2]）であり、プラジニャーカラグプタによれば、「再認知」（pratyabhijñā）（『量評釈荘厳』p. 21, l. 15）、マノーラタナンディンによれば、「知覚の直後に〔生ずる〕世俗的な分別知」（darśanottarakālaṃ sāṃvṛtaṃ vikalpajñānam）（『量評釈注』p. 3, l. 20）である。これらについては、桂紹隆「知覚判断・疑似知覚・世俗知」『藤田宏達博士還暦記念論集　インド哲学と仏教』pp. 533-553 参照。

14) Xは、『集量論』*Pramāṇasamuccaya*第二章 k. 5、Yは、『集量論』第一章 k. 3 の自注で説かれる。若原雄昭「アーガマの価値と全知者の存在証明」龍谷大学仏教研究　第41号 p. 53, 前掲注 1）のビジュレール本 p. 122, M. Hattori: *Dignāga, On Perception*, p. 82 参照。

15) 前掲注2)の小野論文 pp. 153-152 参照。

16) 別の定義を説明したのが「Yも」ということである。（mtshan nyid gzhan bshad pa ni / ma shes don gyi gsal byed kyang // zhes bya ba'o //）（『量評釈荘厳注　極円浄論』Phe 282a[5]）

17) これ〔＝Y〕は、別の第二種類のものである。（'di ni gzhan rnam pa gnyis pa yin no）（『量評釈注』Nye 79a[6]）

18) arthakriyā は、ダルマキールティにとってきわめて重要な術語である。この術語に関し、最近、金子宗元氏によって「'Arthakriyāsamartha'の解釈を巡って」（曹洞宗研究員研究生紀要　第11号掲載予定）という論文が著わされた。金子氏によれば、arthakriyā は「対象の作用」・「結果を生ずること」の二通りに解釈すべきである、ということになる。本稿では、それに従わず「目的の達成」と訳した。その理由は以下の如くである。arthakriyā とは、人間が何らの対象を目的としそれを獲得するまでの一連のプロセスにおいて意味を持つ術語であり、そのプロセスとは単に煮炊きをしたり、喉の渇を癒すためのものではなく、人間の最終目的である悟りの獲得のためのものである。その場合、目的の達成という訳語が適切である。この理由の論証は、今後行う。

19) 前掲注1)のビジュレール本 p. 151、注 2）のフランコ論文 p. 40.

20) 注1)のビジュレール本 p. 153.

21) 注2)のフランコ論文 pp. 41-42.

22) 注1)のビジュレール本（p. 150）では、「文法的には、'論書は迷妄を滅ぼすもの' という陳述と続くように見えるが、デーヴェンドラブッディや彼に続くすべての注釈家達によって、第二のプラマーナの一般的定義として解釈された」と述べられている。

23) 本稿は、拙稿「プラマーナの定義について」駒沢短期大学仏教論集　第 1 号, 1995, pp. 180-169 や注7) 8)の拙稿を経て書いたものであるが、注8)の稿以外の二稿は、基本的な見解において本稿とは異なる。「プラマーナの定義について」の結論②は、本稿の結論から

すれば誤りである。

使用テキスト

ダルマキールティ
『量評釈』ed. by. Y. Miyasaka
『量評釈』「為自比量」章自注 ed. by. R. Gnoli
『量決択』「現量」章 ed. by T. Vetter
『量決択』「為他比量」章　デルゲ版　No. 4211
デーヴェンドラブッディ
『量評釈細注』　デルゲ版　No. 4217
シャーキャブッディ
『量評釈注』　デルゲ版　No. 4220
プラジニャーカラグプタ
『量評釈荘厳』ed. by T. R. Sāṅkṛityāyana
ヤマーリ
『量評釈荘厳注　極円浄論』　デルゲ版　No. 4226
ジャヤンタ
『量評釈荘厳注』　デルゲ版　No. 4222
マノーラタナンディン
『量評釈注』ed. by. R. C. Pandeya, Delhi 1989
ダルモッタラ
『量決択注』 I ed. by. E. Steinkellner & H. Krasser, Wien 1989
『量決択注』III デルゲ版　No. 4227
ジニャーナシュリーバドラ
『量決択注』　デルゲ版　No. 4228

ウユクパ
『量評釈注　正理蔵』ed. by P. L. S. Gyaltsen, Delhi 1981
タルマリンチェン
『量評釈頌の解説　解脱道不顛倒明説』　東北　No. 5450
『量決択大注　密意解明』　東北　No. 5453
ケードゥプジェ
『広大なる論書量評釈の広説　正理大海』　東北　No. 5505
ダライラマ一世
『量評釈善説』Collected Works vol. 5

コラムパ
『広大なる論書量評釈の解説　普賢光明』　サキャ派全書　vol. 11
『量正理蔵の難解個所の説明　七部明説』　サキャ派全書　vol. 12
シャーキャチョクデン
『広大なる論書量評釈の解説　普賢法海』　Complete Works, vol. 18
プトゥン
『量決択注　語義解明』　Collected Works pt. 24
サキャパンディタ
『量正理蔵』　民族出版社　北京　1988

補注

1）G. Dreyfus: Dharmakīrti's Definition of Pramāṇa and Its Interpretaters, *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition* ed. by E. Steinkellner, Wien 1991, p. 32 参照。

2）ダルマキールティにとってプラマーナと正しい知は全同ではない。これについては、拙稿「ダルマキールティの論理学書におけるpramāṇaと samyagjñāna について」駒沢大学仏教学部研究紀要第12号　H. 6, pp. 295-288 参照。

3）年代については、H. Krasser: On the Relationship between Dharmottara, Śāntarakṣita and Kamalaśīla, *Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies*, Narita 1989, pp. 151-158 参照。

4）金沢篤　「空華：ティミラ眼病（眼翳）との関わりで」仏教学　S. 62 第23号，　pp. 29-56 参照。

5）テキスト名については、注2)の小野論文 pp. 162-163 に従った。

6）プラジニャーカラグプタは、最終的な自説に到る前に、次のような様々な解釈を示している。

A）それ〔X〕だけが、〔プラマーナの〕定義であるのに、どうして、別な定義があるのか。然らず。間接的に指示されたもの(sāmarthyākṣipta)は、定義ではないからである。(『量評釈荘厳』p. 30, ll. 10-11)

tad eva lakṣaṇam iti kathaṃ lakṣaṇāntaram / na / sāmarthyākṣiptasyālakṣaṇatvāt /

B）「未知の対象」という言葉によって、すでに把握したものを把握する知は、排斥できるが、Xという言葉によってはできない。(『量評釈荘厳』p. 30, ll. 16-17)

ajñātārthagrahaṇena gṛhītagrāhi pratyayaḥ śakyaḥ parihartuṃ nāvisaṃvādigrahaṇena /

7）ヤマーリとプラジニャーカラグプタの関係については、注2)の小野論文参照。

8）プラジニャーカラグプタは、不二の知を最重要視する。それについては、拙稿「Prajñā-karagupta の Dharmakīrti 理解」印仏研　37-1, 1988, pp. 387-384 参照。

1997　6／29　脱稿